

(仮称) 山田家資料館

[山田庄左衛門家屋敷] 長野県中野市大字江部 46 番地 3
江戸時代の敷地 信濃国高井郡東江部村(7,300 m²、約 2,200 坪)
平成 20(2008)年に中野市へ移管、国道 403 号線沿い(3,970 m²、約 1,200 坪)

[建造物群]

質蔵・文庫蔵	弘化 4(1847)年善光寺地震の後、嘉永元(1848)年棟上しました。
隅の蔵	明治 3(1870)年の中野騒動で焼けた痕跡があることから、幕末のものとみられます。
裏門	飯山城廃城後、門を譲り受けたとの伝承があります。
六間蔵・二間蔵	明治 13(1880)年に建造されたものです。
表門	第二次世界大戦後、取り壊しました。屋根・扉の残骸が残っています。
母屋	中野騒動で焼失後、仮普請として建てた家を、昭和 47(1972)年に改築しました。
奥座敷	明治時代、東京から棟梁が来て建てたと伝わります。
新座敷	昭和 28(1953)年、地元江部の大工・左官が建てました。

[庭園]

作庭年代は不明です。江戸時代と思われますが、文書等の記録はありません。

[収蔵資料]

- ◎古文書 『東江部村山田庄左衛門家文書目録』(全 3 冊) 13,788 点
公開中です。調査研究にご活用ください。
※未調査文書あり、今後順次目録化します。
- ◎書画・陶磁器・漆器・その他工芸品
『東江部村山田庄左衛門家資料目録 山田家のくらしと文化―書画・工芸編―』
平成 26(2014)年 3 月 31 日刊行 発売中です。
- ◎典籍類・版木、生活用具・衣類・農具・酒造道具など、さらに新出文書について悉皆調査、整理中です。これらの資料は地域のくらしや産業を知るうえで貴重なものですので、順次目録化していきます。

(仮称) 山田家資料館 〒383-0045 長野県中野市大字江部 46 番地 3 0269-23-2955

開館時間 午前 9 時～午後 5 時 入館料 無料

休館日 土曜日、日曜日、祝日、年末年始(12 月 29 日～1 月 3 日)

※見学をご希望の際は、上記までご連絡ください。



山田庄左衛門家の400年

山田家の江部来住（1600年代前半）

山田家の先祖は戦国浪人といわれ、初代の縫殿介（生没年不詳）が江部に来住したのは、元和年間（1615～24）ころと伝えられています。江戸時代のはじめに当地を支配した飯山藩主堀直寄（1577～1639）は、戦国浪人を優遇して積極的に迎え入れ、千曲川沖積地などの荒れ地や未開発地の開発を奨励しました。山田家はこのころに一族や抱えの人びとを同道して、江部に来住したものと思われれます。

地主「山田庄左衛門家」の成り立ち（1600年代後半～1700年代前半）

3代目が初めて「庄左衛門」を名乗ります（山田庄左衛門家の創設）。土地の移動状況を示す質地証文は、寛文6（1666）年が初出で、元禄年間（1688～1704）にかけて大量の田畑を買い入れ、土地の集積を進めました。また、周辺藩領の年貢地払い米を買い入れて、穀物売買や酒造業を営みました。享保年間（1716～36）ころまでには、さまざまな経営帳簿を作成するようになり、山田家による地主経営が本格化していきます。現在地に屋敷を構えたのも享保年間です。

地方文人「山田松斎」の活躍（1700年代後半～1800年代前半）

明和6（1769）年に生まれ、天保11（1840）年に72歳で没した7代庄左衛門顕孝は、文人「山田松斎」として知られます。信州中野の畔上聖誕（1773～1822）・山岸蘭腸（1767～1837）らと江戸の儒者亀田鵬斎（1752～1826）に師事し、柏木如亭（1763～1819）・頼山陽（1781～1832）らとも交友しました。七絃琴をたしなみ、『經典穀名考』などの著作を残し、地域の門人たちに講義をしました。また、旅日記「宝善堂記行」「参宮紀行」からは、江戸や京都の文人たちとの人脈が見えてきます。

幕末維新期の山田庄左衛門家（1800年代半ば）

山田庄左衛門家の土地集積はさらに進み、嘉永3（1850）年の小作地は19か村、862石に及びます。天明5（1785）年からは中野代官所との金融取引が始まり、幕末には中野代官所の掛屋として年貢金の運用を任されました。いっぽう、千曲川沖積地に広がる耕地は水害常襲地帯だったため、9代庄左衛門顕義（1814～69）は、篠田市左衛門（1821～1900）・丸山要左衛門（1825～95）らと千曲川の築堤や瀬直し（直流化）の実現に奔走します。しかし、明治3（1870）年12月、北信商社員であった山田家は一揆勢の攻撃対象となり、母屋・土蔵などを焼失しました（中野騒動）。

近代の山田家（1800年代後半～1900年代前半）

中野県から長野県へと移り変わるなか、山田家は第19大区区長などの役職を歴任し、12代庄左衛門（1851～1917）は貴族院議員・衆議院議員などを務めました。明治期における山田家の経済活動は、地域の土地集積から横浜生糸貿易・証券投資・銀行経営などに向かっていきます。12代庄左衛門の弟松三郎（1856～1933）は、横浜生糸合名会社の役員として生糸貿易に携わり、分家の山田亀吉（？～1928）が経営する江部製糸場の生糸も横浜から海外に輸出されました。

旧幕府代官所の接收から伊那県へ

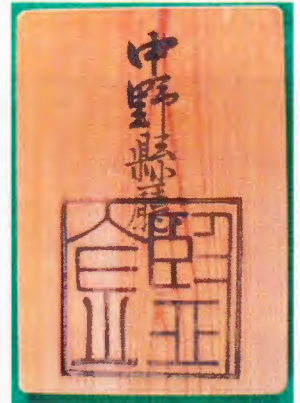
慶応4年（1868）正月、徳川幕府が倒れると直ちに旧幕府領中野代官所は新政府に没収され、同年3月、尾張藩に預けられ尾張藩取締所中野役所となりました。明治2年（1869）3月には信濃国旧幕府領とともに伊那県（県庁は伊那郡飯島町）となり中野局が設けられました。

戊辰戦争中からにせ二分金が大量に流布し、経済の混乱に拍車を掛けました。伊那県はにせ二分金に対処するため、地域の豪農に伊那県商社（北信商社）を設立させ回収をはかりました。

中野県と中野騒動、長野県と改称

明治3年（1870）9月17日、伊那県から東北信分が分離し、「中野県」が成立、明治4年（1871）7月25日まで約11か月存立しました。

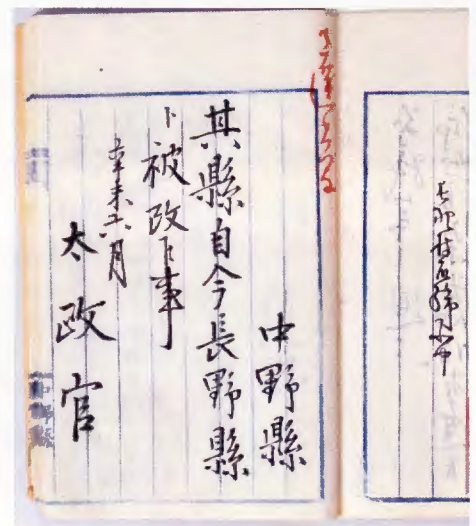
明治2年（1869）ころから、社会経済不安にくわえ凶作も重なり、各地で農民一揆が頻発しました。明治3年（1870）年12月19日、中野県は年貢増徴反対、北信商社廃止などの要求を掲げた中野騒動が勃発し、中野県庁や豪農宅及び中野町・松川村の町並みを焼く大一揆となりました。一時無政府状態と化した中野騒動を、維新政府は重大な事態ととらえました。一揆が鎮静されたあと、中野県は北に偏りすぎていることもあって、街場がつづく善光寺町近くの長野村に移庁、長野県と改称されました。



長野県と明治のむらづくり

明治4年（1871）7月に中野から移転した長野県は、さっそく県庁舎の新築に取りかかります。旧中野県を支えた豪農ら8人が建築事務を取り扱う郡中惣代に任命されました。関係文書から、管内村々割り当てによる建築資金の調達、建築用材の手配など、多忙な惣代衆のようすが見えます。

国・県の行政がいよいよ本格化すると、地域は新たな行政組織の改変、戸籍編成、地租改正、学校設立など、近代国家を支える村づくりに翻弄されます。



（長野県立歴史館蔵）

維新をまたいだ千曲川の瀬直し

善光寺大地震以来、千曲川水害に悩んだ延徳沖村むらは、抜本的治水策として、水内郡上今井村で屈曲する千曲川の直流化を企てました。新川の土地を提供する上今井村と交渉のすえ、明治3年（1870）6月から明治新政府のもと、事業主体は幕末に組織された堀川29ヵ村組合により工事が始まり、明治5年に完了しました。

その後、新政府による行政システムの大改革にあい、上今井村への賠償問題は困難をきわめました。企画から四半世紀を経た明治16年（1883）に示談が成立し、明治18年（1885）に組合会計が清算されました。



(仮称) 山田家資料館

特別公開

横浜 井村製のティーセット — 明治・大正・昭和を支えた生糸 —

会期：2014年11月8日(土)－11月24日(月・祝)

信州中野と横浜 生糸と輸出陶磁器の出会い

明治時代、井村製のティーセットは、横浜で主に輸出用として製作された。

幕末の横浜開港以来、養蚕・製糸業は中野地方の主要産業となり、生糸貿易の拠点である横浜との結びつきを強めていった。

山田家は、明治時代ははじめから横浜生糸貿易関連会社に積極的に投資をし、12代荘左衛門(熊太郎)の実弟松三郎は横浜にでて生糸貿易の実務にかかわった。

当時、輸出品の最右翼にあった生糸貿易を通じて、山田家は横浜と結びつき、同じく当時有力な輸出品であった井村製ティーセットを入手することになったと思われる。

井村製ティーセットは、明治時代の信州中野と横浜を結ぶ「あかし」である。

I-1 中野の養蚕と中野紬

高井郡田上村(中野市)では近世中期の1707(宝永4)年、年貢割り付け状に「真綿」が課せられているから、当地方でも繭から作る真綿は、古くから自家用に生産されていた。

18世紀半ばをすぎ、消費経済の時代が到来し生糸の需要が増すと、1764(明和元)年、幕府中野代官所は「百姓助成」になるとして養蚕を奨励した。1773(安永2)年には養蚕農家に「桑役」を、紬の売買に運上金(営業税)を賦課し、養蚕が課税対象とされた。

1778(安永7)年から1780(安永9)年の史料によると、中野村の市場には中野・小布施付近の約50か村から紬がもちこまれ、「中野紬」は特産品として京都や江戸に送り出されていた。紬・木綿布商人からは、市場価値を高めるため、布の尺幅を統一するようたびたび持ちかけられたが、生産農民にとって負担が大きく困難であった。中野紬が上田紬と同一規格の尺幅統制に動くのは、幕末1849(嘉永2)年のことである。

中野地方では江戸時代後期に紬の商品化は始まったが、養蚕・生糸生産が本格化するのは、1854(安政6)年の横浜開港以降のことになる。



I-2 横浜開港と中野

1854(安政6)年6月2日の横浜開港以来、生糸は最重要輸出品目として大量に輸出され、国内経済におおきな影響をもたらすことになる。中野地方でも繭価は高騰し、養蚕は急速に普及した。1865(慶応元)年、蚕種の輸出も公認されると、高利益をもたらす蚕種業も発達した。この年7月、蚕種渡世人惣代3人は中野代官所の問いに、夏種は横浜に送り、この年初めて外国に売りさばいたと答えている。西江部村では同年、養蚕農家32人が80貫の繭を生産し140両の収益をあげたという。

1868(明治2)年、中野県管内には生糸渡世人が中野村の85人を筆頭に53か村267人、蚕種渡世人は50か村315人がいた。

幕末維新期には養蚕業は当地方の主要産業となり、生糸貿易の拠点である横浜との結びつきを強めていった。

I-3 富岡製糸場に匹敵する中野器械製糸場

1870年(明治3)年12月に起こった中野騒動で市街地の大半を焼失した中野町の復興をもくろみ、当時の区長山岸精一郎、戸長白井彦兵衛らは大製糸場の建設を図った。町の有志や地域の有力者に出資金を募り、長野県の補助金も得て、中野町常楽寺大門に中野器械製糸場を建設し、1873(明治6)年、工女200人で操業を開始した。動力に水車を用い、富岡製糸場と同じフランス式の器械を導入し近代的な設備を備えた製糸場は、当時わが国の三大製糸場のひとつに数えられた。しかし、半官半民で設立された中野器械製糸場の経営は困難をきわめ、その後変転をかさねた。

明治時代、中野地方ではこのほか1872(明治5)年設立の上今井製糸所をはじめ大小さまざまな製糸場が設立された(別表参照)。

生糸産業は基幹産業として、日本の近代化をささえることになる。



「中野町製糸場水車器械略図」関長年 1873 (明治 6) 年
(中野市所蔵)

(別表)

中野地方における明治時代の器械製糸工場

創立年度	社名(または代表者)	設立場所	並数	工員数 (人)	備考
明治5年(1872)	上今井製糸所	上今井村	不明	11	※『豊田村史』には、勸業局による明治12年の調査記録として「十二人掛一ヶ年の製糸八員男三人女八人を使用した」と記されている。
明治6年(1873)	梅松啓助	更級村	16	16	
同上	中野器械製糸場(共有)	中野町	200	220	※民部省の合同出資と衆議院による設立。官の保護のもと、出資者代表である区長山岸清一郎らが工場を経営。「共有社」「中野町共立製糸所」などとも呼ばれた。
明治7年(1874)	中島柳右衛門	岩船村	10	10	
明治9年(1876)	平林惣吉	吉田村	6	6	
同上	黒島弥七	西条村	20	20	
同上	押鎌市弥	新保村	16	16	
明治14年(1881)	信陽社(本田勝柄)	中野町	64	82	※長野県令臨時貸出の命により、東郷軍医長であった本田勝柄が直接中野器械製糸場の経営指導にあたる。その際、名前を信陽社へと改める。
明治15年(1882)	友盛社	篠井村	48	50	
同上	柴本仁惣右衛門	三ツ和村	11	12	
同上	小林清之助	中野町	16	16	
明治16年(1883)	日の出松製糸場(田中作兵衛)	中野町	134	140	※信陽社を買い受け。
明治17年(1884)	田中組(田中関太郎)	中野町	—	—	※信陽社を継承。
明治18年(1885)	松益社(伊藤鶴助)	中野町	—	—	※共同出資、合資会社(のち明治34年には株式会社) ※明治12年に小泉上田町・田中忠七等の組織にかかわる製糸分社として発足。明治18年に設立した。 ※明治27年には器械製糸工場(200人取り)を建設。付帯製糸場を含め938人取りの大工場となる。
明治22年(1889)	小林盛作	延徳村	13	不明	
同上	露崎啓助	延徳村	12	不明	
同上	木村龍之助	延徳村	11	不明	
明治26~27年 (1893~94)頃	彌山製糸場 (金子盛次郎、岡村房吉ら)	穴田村カ	不明	16	※合資製糸場。 ※中野町松益社に加入。松益社第十六号と称し統合。
明治27年(1894)	江郎製糸場(山田亀吉)	平野村	100	120	
同上	豊田 貢	倭村 柳沢	不明	不明	
明治28年(1895)	上野製糸場(上野久七)	倭村 柳沢	40	42	
不明	滝沢卯左衛門	倭村 柳沢	20	22	
明治32年(1899)	倭製糸場(上野和一郎)	倭村 柳沢	42	47	
明治37年(1904)	中野社(伊藤福松)	中野町	—	—	※共同出資、合資会社(のち株式会社)。
同上	丸七製糸場(小林与助)	中野町	不明	不明	
明治38年(1905)	倉田製糸場(倉田一郎)	中野町 一本木	100	120	
明治44年(1911)	高井社(土屋市之丞)	科野村 赤岩	34	40	

(参考)

大正9年(1920)	高井製糸工場 (下高井製糸販売組合)	中野町	600	不明	※高井製糸組合。 ※中野町神田製糸場を買収。現状の家賃賃賃工女50人で操業開始。昭和6年には600並の大工場。
------------	-----------------------	-----	-----	----	--

『中野市誌』、『豊田村史』および聞き取りにより作成。史料は『信濃県史(下巻)』、『下高井製糸』、『高井26・27年』および聞き取り。

中野器械製糸場 各時代の製糸高

経営時期	調査年月	並数	工員		1ヶ年製糸高(貫)
			男(人)	女(人)	
創立	明治10年5月(1877)	200	0	200	1,782
中野製糸所時代	明治12年2月(1879)	200	10	210	640
信陽社時代	明治16年12月(1883)	64	7	75	243
日の出松時代	明治26年10月(1893)	134	不明	不明	1,340

『中野市誌』により作成。史料は『信濃県史(下巻)』昭和12年編。

I-4 生糸の直輸出と江部製糸場

1854(安政6)年の横浜開港以来、生糸は最重要輸出品目として成長を続け、ことに明治後期から大正・昭和初年にかけて最盛期を迎える。

幕末以来、生産地で仲買人によって買い集められた生糸は、横浜の売り込み問屋に送られ、横浜外国商館を通して輸出された。こうしたなかで、1880(明治13~)年代には日本人貿易商による生糸直輸出が試みられ、同伸社・三井物産・貿易商会などが設立された。しかし、本格的に生糸直輸出が展開するのは、1893(明治26)年の横浜生糸合名会社の設立、1896(明治29)年の三井物産の再度参入からである。

山田松三郎(12代左衛門実弟)は、1884(明治17)年、貿易商会に勤務、1893年設立の横浜生糸合名会社の設立には兄左衛門とともに出資、その後代表社員として生糸直輸出に従事した。

いっぽう地元では、1894(明治27)年、山田家分家山田亀吉が江部製糸場を創設した。高規格の生糸生産をめざし、100釜・工員100人で操業し、製品は横浜生糸合名会社から海外に直輸出された。高井製糸場が設立される前年の1919(大正8)年に廃業した。



江部製糸場商標ラベル 明治~大正時代

I - 5 高井製糸場の設立

1920（大正 9）年、有限責任販売利用組合高井製糸場は山田家 13 代荘左衛門（董平）を組合長に、下高井郡一円の組合員 247 人で創設された。中野町の神田製糸場あとに 48 釜で操業を開始し、1931（昭和 6）年に同町西町に第二工場を新築した。高規格の生糸生産をめざして半田式多糸操糸機を導入し、あわせて 600 釜の大工場となった。しかし、折しも昭和恐慌による繭価暴落にくわえ組合員からの供繭不足もあり、たちまち経営は困難に陥った。その後、経営陣を交代して更生がはかられたが、1942（昭和 17）年、企業整備令により廃業した。



高井製糸場 昭和初期
半田式多糸操糸機を導入した際の記念絵ハガキが



高井製糸場全景 大正末～昭和初期（王日神社近辺）

II - 1 シノワズリと日本陶磁器の輸出

ヨーロッパでは 17・18 世紀に、中国趣味の美術様式が流行した（シノワズリ）。中国製の陶磁器と日本製の陶磁器は区別されることはなかったと思われるが、中国の陶磁器や日本の古伊万里様式や柿右衛門様式の陶磁器は上流階級のステータスとして珍重されていた。これを背景に、江戸時代の 1659（万治 2）年のオランダ貿易船の記録にはティーカップとソーサーが日本から輸出された記録が残り、以後毎年、千単位のティーカップやソーサーが輸出された記録が残っている。しかし、18 世紀の終り頃にフランス革命が起こると、中国や日本の陶磁器への関心は急速に薄れていった。



色絵花文ティーカップ&ソーサー 井村彦次郎商店 明治時代

II - 2 開港・ジャポニスムと陶磁器の輸出

再び日本陶磁器にヨーロッパの関心が集まるのは、横浜が開港された 19 世紀の半ば頃からである。この頃ヨーロッパでは、日本美術工芸に対する熱狂的な関心が高まった。これをジャポニスムと呼ぶ。こうした日本美術工芸への関心は、ヨーロッパの新しいデザイン様式アール・ヌーヴォーが成立する契機となったともいわれている。ジャポニスムを背景に 1867（慶応 3）年のパリ万博や 1873（明治 6）年のウィーン万博で、日本陶磁器は高い評価を受け大人気であったという。明治政府も陶磁器を重要な輸出品の一つとして重視した。

貿易港である横浜は輸出用陶磁器の一大生産地となることになった。1871（明治 4）年には宮川香山が真葛焼を創業し、1875（明治 8）年には井村彦次郎陶器店、香蘭社の支店などが設立され、横浜を拠点に陶磁器が海外に輸出されることとなった。また、明治維新とともに衰退した京都の陶器生産地においても、1872（明治 5）年頃から京薩摩と呼ばれる陶器が輸出され、衰退した京都の陶器産業も復興することになった。

Ⅱ-3 美術工芸品としての陶磁器

明治時代、輸出用陶磁器としてティーカップなどの日用品も生産されていたが、ジャポニズムを背景として生産された陶磁器は装飾性に富んだ美術工芸品としての性格を強くもっていた。1867(慶応3)年のパリ万博、1873(明治9)年のウィーン万博などに出品され高い評価を受けたのはそうした美術工芸品であった。初代宮川香山に代表される立体的な文様(高浮雕)、手書きによる精緻な日本の文様、それらは職人技の極地とも呼べるものであろう。こうした精緻な職人技は陶磁器に限らず金工細工などにも共通することであった。本来の機能を損なうほどに装飾される器、あるいは道具への憧憬は、産業革命による大量生産品に対して抱いたヨーロッパの人々の不満の反映であったのかもしれない。明治政府が『温知図録』に示した輸出用陶磁器や金工品などのデザインから、政府も精緻な職人技が必要であると考えていたのであろう。展示した井村製のティーセットの手の込んだ日本的な文様にもそうした職人技(画工の技)をみることができる。

※『温知図録』は、明治8~14年頃にかけて編纂された政府による意匠指導書で、博覧会用の工芸品製作や、貿易拡大を企図してまとめられた図案集。



色絵魚子地花鳥文ティーセット(ポット・部分)
井村製 明治時代

Ⅱ-4 日用品としての陶磁器生産

明治期をとおして、輸出陶磁器を高価な美術工芸品とするべきなのか、ティーカップやソーサー、ティーポットなどの実用的な用途をもったものにするべきなのかという考え方があった。美術工芸品としての陶磁器は万博で高い評価をえていた。一方、実的な用途をもつティーセットなども手の込んだ日本的な文様が描かれていた。ティーカップやソーサーは、商品としての需要にこたえるためには同じものを大量に生産する必要がある。しかし、ウィーン万博などに出品された陶磁器は特注品であり、同じものを大量に生産できたわけではない。明治政府はこの点を懸念し、1876(明治9)年のフィアデルフィア万博の頃から、明治政府は美術工芸品としての陶器生産から、日用品としての陶器生産への転換の必要性を認めている。商品として、日用品としての器には、それまでの日本陶業の技術には求められてこなかった磁器の白さや、均質な器形を備えた同一規格の製品の大量生産が求められた。この困難さを乗り越え、ディナーウェアの輸出に成功するのは日本陶器(明治37年創立・現ノリタケカンパニーリミテド)であった。



幾何文コーヒースセット 日本陶器製 明治末~昭和初期 (山田松三郎家伝来資料)

Ⅱ-5 井村製ティーセット、カップ&ソーサー

井村彦次郎陶器店は横浜市本町二丁目32番地にあり、松石屋と号した。尾濃地方などから素地を買入れ、この素地に客の好みの文様を描き輸出した。1877(明治10)年ごろには職工200人を擁している。(仮称)山田家資料館蔵の井村製ティーセットには「為山田君井村製之」と金彩銘がある。日本の伝統的なモチーフである鳥や草花が染付によって描かれ、それぞれのモチーフ間の空白を埋めるように金彩の点描が施される。ティーセットという洋風の機能とフォルムに日本の伝統的なモチーフが絵画的に描かれ、不思議とマッチしている。また、各々のティーカップ&ソーサーには秋草、牡丹、扇と日本的なモチーフがデザインされている。色絵花卉文ティーカップ&ソーサーは、花卉がカップやソーサーの中心を花芯として全面に装飾的に配され、モチーフとモチーフとの間に空間をもつ他の文様とは趣を異にする。守屋知子氏はアール・ヌーヴォー様式に通じるものと指摘している。



色絵魚子地花鳥文ティーセット
にある銘
(シユガーポットポット裏面)



色絵花卉文ティーカップ&ソーサー
井村製 明治時代



ソーサーにある銘



激動の幕末から明治を生きた女性

山田家の女子教育ことはじめ

平成 25 年 6 月 1 日 (土) ～ 6 月 30 日 (日)

午前 9 時～午後 5 時 入場料 無料

水の面に
なにながめけむ月影は
なか空たかく
すみぬるものを



木島平村泉龍寺参道わきに建つ歌碑。歌の作者「貞子」とはだれなのか。刻まれた建立者の人脈からなぞ解きがはじまる。江戸生まれ、幕末から明治・大正を生きた女性の生涯とともに、山田家が一族娘たちの教育にかけた思いをたどる。

貞子

記念講演

「女流歌人岩井貞子の生涯」

講師

木島平村教育委員会

樋口和雄氏

6 月 22 日 (土) 午後 2 時から 3 時 30 分

(仮称) 山田家資料館

講演会は

事前の申し込みが必要です

定員 50 名

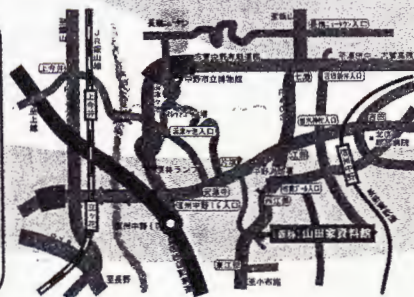
申込 〇二六九一三八一三一二

中野市教育委員会生涯学習課

場所 (仮称) 山田家資料館 中野市江部 46-3

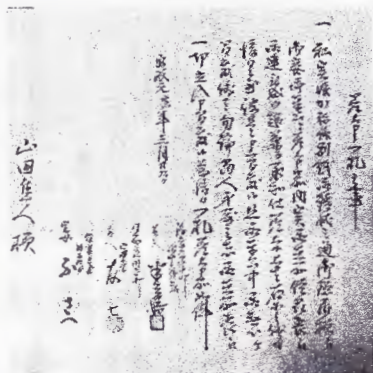
0269-23-2955

主催 中野市教育委員会 後援 木島平村教育委員会

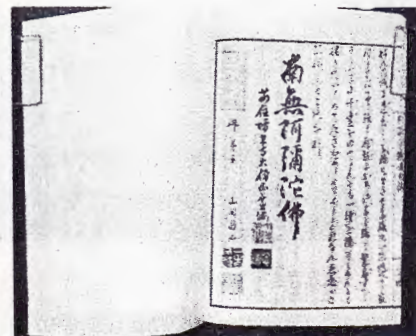


岩井貞(貞子)の教養

貞(貞子)は山田家娘たちの教育係だったのか

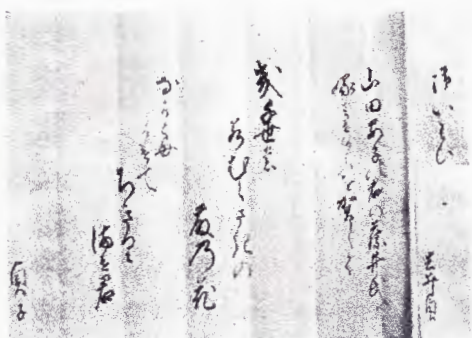


安政元(1854)年 差上申一札之事(文書 9-6-2)
かね事貞、江戸から信州表へ下る。

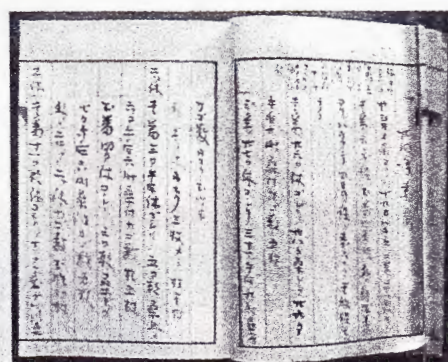
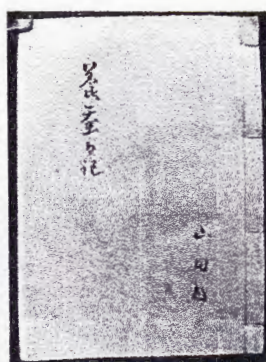


前増上寺大僧正念海『日課念佛士女訓』(典籍 226)

文久元(1861)年、山田昌山(隼人、8代庄左衛門)が再刻した女性の教訓書。



山田家娘によせる岩井貞子の祝歌(文書 72-7)
明治 27(1894)年、12代庄左衛門・とら夫妻長女
やすの結婚を祝して詠む。



「養蚕日記」(文書 84-3)

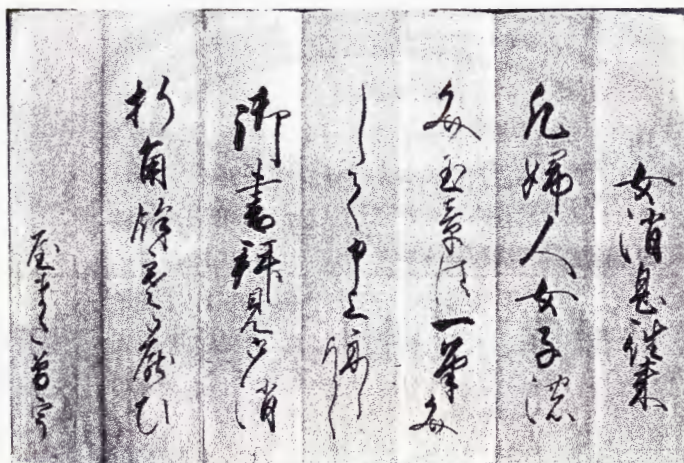
明治 33(1900)年～明治 40(1907)年

貞の教え子「とら」は、12代庄左衛門の妻として本家を継いだ。彼女の小簞笥にのこされた養蚕の記録。

嘉永 6(1853)年、9代庄左衛門頭義は幕府中野代官高木清左衛門の掛屋(金融)を任じられる。父の隠居隼人(8代庄左衛門頭済)は代官所預り金の運用に、江戸に出た。安政元(1854)年、隼人は江戸浅草生まれの岩井かねこと貞を「めかけ奉公」として信州に連れ帰った。14歳の貞は江戸で教育を受け、女姓としての教養もつんでいたであろう。隼人は孫娘たちの教育を思いたったのか。

明治 34(1901)年、下高井郡往郷村(現木島平村)泉龍寺に建てられた貞の歌碑。ここに、幕末生まれの隼人の孫・ひ孫の女性8人が建立者名を刻む。貞の教え子であろう。

このうち、山田とらは12代庄左衛門の妻として本家を継ぎ1男4女を、下高井郡新野村(現中野市)の中山家に嫁いだ。とらは夫亡きあと作曲家中山晋平ら5男を、上高井郡小布施村(現小布施町)市村家に嫁いだ。きくは3男7女を育てるなど、いずれも新時代をひらく人材をはぐくむとともに、近代化の波に揺れる地域の家を守りとおした。



山田ぞう手習帳(中山晋平記念館蔵)

女流歌人 岩井貞子の生涯

木島平村文化財調査専門幹 樋口和雄

水の面になにながめけむ月影は なか空たかくすみぬるものを

この短歌は、下高井郡木島平村の泉龍寺総門前の大きな石碑に、豪快な運筆で彫られている。歌碑の建立は明治34（1901）年で、短歌の作者と筆者は「貞子（ていこ）」である。貞子とはどこのだれなのか。

貞子は天保11（1840）年に、江戸の浅草で生まれた。姓は岩井で、幼名は「かね」といった。14歳のとき、高井郡東江部村（現中野市）の豪農・山田庄左衛門隠居隼人の妾奉公人として信州入りした。山田家に来て「かね」から「貞」と改名した。10年ほど山田家に奉公した後、隼人（8代庄左衛門顕濟）が亡くなったこともあって、剃髪して同家を去って尼僧（名は了然）になった。



その後、貞子はどう生きていったか。貞子は、飯山町の大聖寺住職であった渡辺俊龍と知り合い結婚。明治7年（1874）からは夫婦で木島平村の泉龍寺に住むようになった。このとき、往郷小学校（元木島平村中部小学校）の前身である求道学校が、泉龍寺に開校した。このころから貞子は、書道と短歌の道に専念するようになった。貞子夫妻には男児がいたが、泉龍寺近くの萩原家の嫡子として養子にだした。山田家との付き合いもつづいていて、同家の家族と東京へ旅行したり、娘たちに勉強を教えたりしていた。いったん萩原家へ養子にだした男児を、こんどは山田家12代庄左衛門熊太郎・とら夫婦の養子に迎えてもらった。

明治29（1896）年、泉龍寺の住職であった渡辺俊龍が富山市の光厳寺へ異動になった。しかし、貞子は夫の赴任にはついて行かず、泉龍寺にとどまって短歌や書道、裁縫を教えていた。木島平村内には貞子が頼まれて書いた句碑や短歌の短冊がいくつも残されている。彼女が詠んだ和歌は山田家にも所蔵されている。また、作曲家の中山晋平の母親（山田家一族の娘）のために書いた手習帳も残っている。のびやかで流暢な味わい深い書体である。独特の書体は一見して貞子の字とわかる。

泉龍寺に建立された歌碑の裏面には、世話人や有志者56人の名前が刻まれている。建立は大規模に計画され、山田家出身の女性たちの名前も刻まれている。明治41（1908）年の春、貞子がちょうど70歳になる年、泉龍寺はもらい火で全焼してしまった。この大火で、貞子は35年間住んだ木島平を去る決意をした。貞子はその後、どこで住んだのか。幸い、歌友であった月岡周平あてに送った手紙や葉書が、10通も木島平村の月岡家に残されていた。群馬県渡瀬村（現館林市）の雲龍寺から発信されたものだった。ではなぜ、貞子は遙か遠くの雲龍寺へ移住したのか。

じつは、山田家の養子になった貞子の男児は、泉龍寺で得度して僧侶になった。名前は山田宗哉といい、一高（東京大学教養部の前身）へ進学、早稲田大学の英文科を卒業し、成人して雲龍寺の住職になっていたのだった。山田宗哉は、足尾銅山の鉍毒問題を国会で取り上げた社会運動家・衆議院議員の田中正造と親しく、栃木県境の雲龍寺が鉍毒対策事務所にもなっていた。この寺は鉍毒被害民が大集会を開いた場所であり、正造翁はしばしば宿泊することもあった。大正2（1913）年に正造翁が71歳で亡くなったとき、密葬は雲龍寺でおこなわれ、戒名は山田宗哉住職がつけた。母貞子はその様子を見守っていたにちがいない。

大正9（1920）年正月、貞子は雲龍寺で息を引き取った。戒名は「黙室了然尼首座」。妾奉公からはじまった貞子の生涯は、苦難をはねのけて才能をみごとに開花させた80年間だった。

なお、山田家で先ごろ見つかった高橋由一の油絵制作のとき、貞子も山田家娘の嫁入りに付き添い、11代庄左衛門らとともに上京していた。

近代学校教育と山田家の娘たち

明治5(1872)年8月の学制頒布をうけて、明治6(1873)年5月、地域の学校「愛育学校」が誕生した。学区の変転を経て、明治22(1889)年6月、平野尋常小学校となり、現在につづく。

明治21(1888)年4月、郡役所のある中野町に下高井高等小学校が創設される。明治25(1892)年に校舎が新築され、明治43(1910)年まで存続する。

明治生まれの山田家のこどもたちは、整備がすすむ教育環境のもと、草創期の学校教育を受けた。修了証書・卒業証書・皆勤賞・学習手帳などから、娘たちの学業のあとをたどる。

平野小学校の変遷

- (明治6.5 開設) 愛育学校 [東江部・西江部・岩船・吉田・片塩・安源寺・草間・牛出・栗林・大俣・立ヶ花]
- (明治8.7 独立) 啓発学校 [安源寺・草間・立ヶ花・牛出・栗林]
- (明治12.4 分離) 好徳学校 [大俣]
- (明治15 年洋風校舎新築) (明治19 年廃校)
- (明治19.4 統合) 安源寺学校 [江部・片塩・七瀬・大俣・安源寺・草間・立ヶ花・牛出・栗林]
- (明治19.4 統合) 中野学校 [中野・小田中・岩船・吉田・西条・一本木]
- (明治22.6 創立) 平野尋常小学校 [江部・片塩・岩船・吉田]
- (昭和22.4) 平野小学校
- (昭和30.4) 平野小学校 [七瀬加わる]



愛育学校(平野尋常小学校)校舎 (明治15年建築)

証書でたどる山田家の娘たちの学業

山田やす 【12代荘左衛門長女】

明治9(1876)年5月生

明治15(1882)年5月ころ 2番学区公立愛育学校入学

明治19(1886)年4月 愛育学校廃校、安源寺学校へ

明治20(1887)年4月 安源寺学校尋常小学科を卒業

明治21(1888)年3月 安源寺学校小学科温習修了

明治21(1888)年4月 下高井郡高等小学下高井学校
2年級に入学(中野町の旧陣屋跡)

明治24(1892)年3月 下高井高等小学校(南照寺庫裏)卒業

明治15(1882)年、満6歳で校舎新築中の愛育学校に入学、明治21(1888)年4月創設の高等小学下高井学校に入学し3年間学ぶ。卒業時の同級生は、男10名、女3名。変転する草創期の学校教育を受けた。



山田やす・山田のぶ 下高井高等小学校学習手帳

現在の中学1年生の世界地理。文章や地図は手書きだが、その内容は高度なものである。

山田のぶ 【12代荘左衛門三女】

明治15(1882)年8月生

明治21(1888)年4月 安源寺学校入学

明治22(1889)年6月 平野尋常小学校創立につき移る

明治25(1892)年3月 平野尋常小学校卒業

明治25(1892)年4月 下高井高等小学校入学

明治29(1896)年3月 下高井高等小学校卒業

整備がすすむ教育環境のもと、尋常小学校4年・高等小学校4年の学校教育を受けた。下高井高等小学校の同級生は男41名、女7名であった

明治32(1899)年、埴科郡松代町(現長野市)の旧松代藩御用商人八田彦次郎に嫁ぎ、昭和36(1961)年、79歳で没した。